門跡へ光臨、北ノ方御座敷へ請ジテ飯マイル、御盤二三イヅレモ金ニタマルナリ、北ノ方モ御座敷へ御出アリ、石田治部少輔、増田仁右衞門、大谷紀伊伊御供也、抛筌齋、藥院、宗久、宗薫、御供也、御亭ニテ飯マイル、侍五十二人、

〔駒井日記上〕後九十一日〇文祿二年　一大閤樣、有馬御湯治爲御見廻、從關白樣熱海去六日之御書共到來、一有馬御湯治御相應候哉、承度候而言上候、就中我々事、先書如申入、彌得快氣之由宜申上候也、閏九月六日、秀次御判、木下半介どのへ、一ありま御たうぢのよし、みまひとして申〻、さだめてゆもふさひ申候はんとおぼえさせおはしまし候、わが身もたうぢゆへ、このほどは、なを〳〵心よく候まゝ、めでたくやがて爰やうらく申候て、くはしく申まいらせ候べく候、大かうの御かたへも文にて申候、なをかさねてめでたき御事ども申うけ給候べく候、此よし心え候て申べく候、〻〻、九月六日、ひで次、北政所殿上らうのかたへ、一みまひとして、おほせつかはされ候御ひろひ、いよいよ御そくさいにおはしまし候や、てんがたうぢゆへ心よく候まゝ、きづかひあるまじく候、さては大かうの御かた、ありま御たうぢ、さだめてゆふさひ候はんと、をしはかりまいらせられ候、このよし心え候て申候やにて候、〻〻、九月六日、ひで次、大坂二丸殿つぼねかたへ、

〔太閤記十六〕秀吉公有馬御湯治之事

卯月廿九日、御湯治に付てれき〳〵の御伽衆十九人つれられ、御慰のかず〳〵云はんかたもなし、御逗留中方々より捧物其數を尽らず、有馬中へ鳥目二百貫、湯女共に五十貫くだされ、谷中のにぎはひいと目出見えし、五月十二日御上りなされけり、

〔一話一言三十〕攝州有馬湯山町古文書〇中略

攝洲有馬山御藏米御算用狀